

『日本昔話の構造と語り手』

石井正己

本書は、私と同年代に属する著者が問うた最初の論文集である。タイトルに示された「構造」と「語り手」は、昔話を研究する者ならば、誰でも一度は挑戦してみたいテーマである。研究はその歴史や状況の制約を受けるものだが、この二つの術語は、一九八〇年代以降の昔話研究の中心と言つてもいい領域であり、それに対しても果敢に挑戦を試みたのが本書であつた、と見ることができる。

タイトルに示されたとおり、序章と終章を除けば、大きく、「第一部 日本昔話の構造」

韓国との比較を視点として」と「第二部新しい語り手論に向けて」の二部から構成されている。文化人類学と民俗学の双方に造詣をもち、理論的分析と実践的調査との総合から「日本昔話」の特質と現在を明らかにしようとしている。それがどこまで到達できるか、できるだけ直な意見を述べてみたい。まず第一部は、昔話の構造分析を載せる。

具体的には、「第一章 昔話の構造分析の課題」「第二章 韓国口承説話の分類体系の検討」「第三章 異類婚姻譚の類型分析」「第四章 富の獲得をめぐる昔話—登場人物の対立關係（1）—」「第五章 来訪者をめぐる昔話—登場人物の対立關係（2）—」からなる。初出を見ると、第一章が一九八六年と八九年で早く、第四章と第五章が一九九一年、第三章が九三年、第二章が九四年である。

第一章は、ボガトウイリヨフとヤコブソン

の理論を援用しながら、ラングとしての作品

の成立を説き、構造分析の有効性を論じる。

ここでいう構造分析とは形態論的な構造分析

のことであり、その前提になる研究として、

そして、分類の区分を説明した上で、その目

的が「韓国人の意識」を探る点にあることを

引き、彼には「比較文化論の視点が欠けてい

ること」という批判を取り上げる。日本における

韓国の昔話研究は、これまで崔仁鶴の『韓國

昔話の研究』に依存してきたが、その段階か

ら抜け出したことを告げる紹介であった。

この章の後半では、異類婚姻譚を取り上げ

て、この分類が生まれてきた背景を分析した

てきた人々の思想」の読み取りに置き、そのため構造分析を行う、という。それを導き出すための具体的な分析が記述されることになるが、構造分析から果たして「思想」は見いだされるのか。ラングの理論と構造分析との関係は措くとしても、以下の章で「思想」がうまく解明できたとは言いがたいように思われるが、どうだろう。それは、そもそも研究の目的をどこに置くかという認識と深くかかわっている。

第二章は、一九七九年から八四年にかけてまとめられた『韓国口碑文学大系』による分類作業の成果をまとめる。趙東一の基本構想は「論理的一貫性を維持しながら、資料の実情を忠実に包括する」という、二つの目標を一度に達成しようとした点に特色があった。そして、分類の区分を説明した上で、その目的が「韓国人の意識」を探る点にあることを引き、彼には「比較文化論の視点が欠けてい

上で、「日本と韓國、双方の類型分類の利点を活かして 比較のための新しい枠組みを設定すること」を提唱している。この提唱は第三章の「異類婚姻譚の類型分析」で、著者自身によつて深められることになる。その分析は「日本と韓國の異類婚姻譚の類型」という表に整理される。この仕事は大変な労作で、本書で最も重い位置を占めている。

に対する再検討を唱えるところまで進めなければ、中途半端だという印象は否めない。結論としては日本と韓国の「思想」の違いが導き出されているが、にわかに納得することが躊躇される。

第二部は遠野の具体的な事例研究が中核にある。第二章は、「ふるさとイメージ」を外部から与えられた岩手県遠野が「観光」としての語りの場を用意してゆく経緯について述べられている。「語り部ホール」を観察の場

は「日本と韓國の異類婚姻譚の類型」という表に整理される。この仕事は大変な労作で、本書で最も重い位置を占めている。

『韓國口碑文学大系』が使われなかつたことは残念であるし、『日本昔話大成』『日本昔話通観』が混在したままの分析であるために、データに一貫性がない。

本書は「日本昔話」の研究を名乗ったのだから、『韓国口碑文学大系』に対して施された丁寧な分析と同様な、徹底的な資料批判が『日本昔話名彙』『日本昔話大成』『日本昔話通観』に対して行われるべきではなかつたか。比較研究を通して、「日本昔話」の分類体系

第一部には、日本についても韓国についても、「語り手」に対する考慮や認識はまつたく見られなかつた。おそらく著者の中に「語り手」という視点が入ってきたのは、一九九四年度の作品『遠野民俗誌94／95』を作成する経過であつたと推測される。それは、第二部の初出がすべてそれ以降であり、第一部と分断されていることからも明らかである。一部にまとめるよりも、むしろ「構造」と「語り手」の一冊に分けて充実させたほうがよかつたか、と思う。

に対する再検討を唱えるところまで進めなければ、中途半端だという印象は否めない。結論としては日本と韓国の「思想」の違いが導き出されているが、にわかに納得することが躊躇される。

次の第二部は、「新しい語り手論」に向けてである。「第一章 語り手の視点と語りの場の変容」「第二章 觀光の場のなかの昔話」と語り手—岩手県遠野の事例から」「第三章 語り手から見た昔話—岩手県遠野の觀光の現場から」（資料）」「第四章 語り手の実践への視点」からなる。初出を見ると、第二章が一九九六年、第三章が九七年、第一章が九九年、第四章が新稿である。

第一部には、日本についても韓国について

第二部は遠野の具体的な事例研究が中核にある。第二章は、「ふるさとイメージ」を外部から与えられた岩手県遠野が「觀光」としての語りの場を用意してゆく経緯について述べられている。「語り手ホール」を觀察の場とした聞き取りやアンケートの調査から、「語り手」と「聞き手」の意識を明らかにしてゆく。第三章は、「語り手」と「聞き手」から見た昔話についての聞き取りを、対話そのままに翻字してある。なかでも興味深いのは、「若い世代の取り組み」にまとめられたこの章は「民俗誌」として一章にせりあげるよりは、第二部の資料編として位置づけるべき内容だろう。

第一章で「語りの場の変容」を論じ、それと呼応するよう、第四章では、語り手の習得過程に関する考察を経て、「新しい語り手」の「実践」を説明する。第二章と第三章の遠野の事例を、このような枠組みでまとめたのである。しかし、そうした論じ方をするならば、現在に至る「語り手」のさまざまなる動向に目を向けてゆく必要があるだろう。むしろ、「観光の場」の「語り手」の「実践」という点で、その特色を掘り下げる行き方も

あつたのではないか。そして、本書のねらいに合わせるならば、例えば、鈴木サツという

「語り手」の「実践」した昔話は、「日本昔話」の「構造」とどう向き合うのか、それが聞きたかった。

本書を読んでみて、第一部から第二部へと

研究が進んだことが確認できる。それは、韓国から遠野へ、「構造」から「語り手」へという動きだった。だが、「構造」と「語り手」の関係は端緒をつかんだという段階ではないか。韓国と比較しながら述べられた「構造分析」と、遠野における「語り手」とに連関はまだ見いだされていない。だが、私自身の希望を述べるならば、その関係を論じることを視野に入れつつも、まずはそれぞれのテーマに対する徹底的な追究を望みたい。著者の研究がそうしたかたちで進んだら、日本書への総評として、本間氏は、ハワーディングフル

(大阪大学出版会、本体六八〇円)
(いしい・まさみ／東京学芸大学)

書評

内ヶ崎有里子著

『江戸期昔話絵本の研究と資料』を褒む

上 笠一郎

本語のうちの尤なるひとつであり、それを用

いての本間氏の賞讃には力があった。わたしはその会の司会者であったのだが、しばし立場を忘れるほど心博たれたのであった――

逸見久美さんの『評伝与謝野鉄幹・晶子』(一九七五年・八木書店)が上梓されその記念の会が催されたとき、卒寿を越え日本近代文学研究の最長老であった本間久雄氏は、祝辞と

著書は、A5判およそ七〇〇ページの大冊で、『これはワンドフルな書物であります』といふうに言われた。逸見さんのこの

与謝野夫妻の明治期末までの生活と文学を網羅的にとらえたもの、逸見さんの夫妻にたいする文学的な深い愛情をモメントに精緻きわまる実証をもつて書きつらぬかれており、それまでの寛・晶子研究の水準を一挙に高めた

5判・五五〇ページ・布装・函入りのこの本は、江戸期の昔話絵本、日本児童文学の前史

でもあればまた近世庶民文学の一環でもある

文化にたいするほとんど最初の収穫である――といふうに言いたいと思う。A

5判・五五〇ページ・布装・函入りのこの本

果実になぞらえれば大粒にしてその味甘美な一果なのである。研究の内容・規模・達成度

いずれの点から見るも劃期的であり、ハライ

ル▽という言葉を使われたのである。

ハワーディングフル▽という形容詞は英語学習の最初に教えられる言葉であって、そして陰翳満たぬ最初の出版でこのような書物を世に出

すとは、本当にワンドフルな人生だと祝福せ